

平家物語の説話と時間・続

——説話の記事量の働き——

今 井 正之助

はじめに

平家物語の従属説話は、時間的に独立した世界（過去の出来事・時間）を物語るものでありながら、ときに物語場面の時間（物語的現在）に直接関与する場合がある。その関与のあり方には

A、説話の記事量そのものの働きとして
 B、表示された、説話の時間（季節・日付）の機能としての二つの場合があり、後者については別稿^{〔1〕}で扱った、本稿では、前者の事例について述べようと思う。この事例についても覚一本を中心に論じていくことになる。

対象とする説話の範囲は以下のものである。
 ① 先例、由緒、逸話・伝記など、物語の本筋から逸脱している叙述。

② ある程度まとまった分量を有するもの。（説話が、物語の時間に関与してくるには一定の記事量が必要と考えられ

るからである。ここでは便宜的に岩波大系本で一頁・約五六〇字以上を目安とする。）

一、日付の飛躍と説話

小稿の契機となったのは以下の箇所である。

源平盛衰記		覚一本	
① 師高、加賀守となり、暴政を行う。	安元元12 29	①	安元元12 29
② 目代師経の舍人、湧泉寺衆徒と争う。	[安元二二]	②	(師経自身の狼藉) 同二夏比
③ 師経、湧泉寺を焼討ち。		③	
④ 白山衆徒蜂起し、加賀庁に寄せるも、師経は既に逃亡。	7 1	④	7 9

5 白山、本山山門に寺官を遣わし、訴える。 (10月比)

6 山門の許容なく、寺官下国。 11比

7 寺官、再度山門に「越年」して訴えるも不首尾。

⑧ 白山、強訴を決議し、神輿を振立て出立。 安元三 1 30

9 神輿、諸処を経て、敦賀に到る。(この間、上落中止を求める加賀留守所牒状とそれを拒否する返牒あり。)

10 山門貫首明雲、寺牒とともに使者を遣わし神輿を抑留。 安元三 2 19

11 白山返牒 安元三 2 20

12 白山大衆六人、叡山に赴き、助力を請う。 同 29

13 白山上洛の首謀者を召し出すよう、山門に院宣あり。 3 9

14 山門大衆、白山助力を決す。

15 白山使者、敦賀に下る。

⑩ 白山神輿、敦賀を発ち、日吉社客人宮に到る。 14 12

ナシ

⑧

ナシ

⑩

同 8 12

⑰ 山門大衆、師高らの処罰を奏聞するも、裁許なし。

⑱ 山門の訴訟重き事

イ 明尊座主補任騒動 後朱雀院御宇

ロ 白河院の言葉

ハ 平泉寺の帰属問題 鳥羽院御時

ニ 匡房の諫言 堀河院御宇

ホ 願立—発端 寛治四年

師通死去 承徳二 6 28

⑲ 山門、強訴に及ぶ。 治承元年 4 13

⑰

ロ 八鳥羽院御時

ニ 嘉保二 3 2

ホ 永長二 6 27

⑲ 安元三 4 13

* ②の年次「安元二」は便宜上、付したものの。

* 5の日付「10月比」は11の返牒の文言による。

* この部分、延慶本の記述にいくつかの混乱のあること及び、そのことの示唆する問題点については、安藤淑江氏「延慶本平家物語における資料蒐集の一側面——白山事件の場合——」(国語と国文学 60—4, 83, 4)に詳しい分析がある。

* 屋代本は⑲の前に師長、重盛の叙任記事「安元三 3 5」を記す。

みるように盛衰記がほぼなだらかな時間の経緯を示しているのに対し、覚一本においては鶴川の騒動が直ちに白山神輿の上落へと連なり、しかも、日吉祭礼を停止しての山門強訴は盛衰記と同様の時日である結果、【願立】を中核とする一連の故事先例（以下【願立】とのみ称する）を挟んでほぼ八ヶ月の日付の飛躍が生じている。【願立】前後に、師高師経を処罰するようにとの山門の訴えもなかなか埒が開かなかつたと述べられてはいるが、あの血氣盛んな大衆達が八ヶ月の間、ただ手を拱いていただけなのかという疑問をいだかせる、極めて不自然な空白である、しかし、実際にこの部分を読み進めるときには、この日付の飛躍の不自然さはあまり意識に上らないように思われる。ただし、それには四頁余に及ぶ長大な【願立】の存在を無視できないのであって、これを除外した場合、このような日付構成は成り立たなかつたであろう。

これらの箇所は記述の整理、集約化の結果として説明されるのが通例であるが、無作為に記述を刈り込んだ結果の偶然の産物ではないように思う。覚一本がどこまで意識的であつたかは直接論証できることからではないが、少なくとも我々の読みの心理機構の問題として【願立】の存在意義を考えてみる必要があろう。

この【願立】前後が最も顕著な箇所であるのだが、同様に覚一本において一ヶ月以上の日付の飛躍が見られを箇所をあげるると以下のようである。なお、年単位で日付が移行する、物語冒

頭部及び終結部を除き、巻一「鶴川軍」以降巻十二「吉田大納言の沙汰」までを範囲とする。□は巻数、【】は説話を示す。

□安元元12 29、同二夏比／同8 12、【願立】さるほどに……
 安元三 4 13／□同（6）22、さる程に、さる程に、或時、
 かくて4 5日過ければ、さるほどに、同8 19／同9 20、其
 後、其比、さるほどに、治承元丁酉、或時、【蘇武】③治
 承二正1／（正）18、去程に、6 1／7月下旬に出たれ共
 9 20比／9 20比、さる程に、去程に、さる程に同年の11 12
 ／2 10比、3 16／やよひの末、有王わたて廿三日と云に、
 同5 12／同5 12、其比、いくばくの日数を経ずして、同7
 28／8 1、【重盛追悼話群】同11 7／同（11）23、冬もな
 かばすごさせ給へば年さり年来て治承も四年になりけり
 ／④同正20、2 21／⑥9 1、又、大小事の忽劇にうちまぎ
 れて其後沙汰もなかりけり、同12 24／3 10、4 10／同4 10、
 5 24／5 24改元あて寿永と号す其日、同9 2／同（10）7、
 さる程に寿永二年になりけり／⑩同11 18、あそびたはぶ
 れてのみ月日ををくられけり……ことしも既にくれにけり
 ／⑫同9 29、次日まで、さる程に、次日、夜を日について
 馳下り、其後、其後、同11 2

平家物語は日次記ではなく、対象とする記事の性格により日付の繁簡が生じるのは当然である。例えば、治承五年7月14日の養和改元から翌年5月24日の寿永改元を経てその年が暮れるま

でのほぼ一年半を、平家物語は僅か五頁足らずで駆け抜けているのであり、巻六に日付の飛躍が多いのはそのせいである。また、巻三「7月下旬に出たれ共920比」「210比、316」などは一連の旅の行程であり、時間の空白があるわけではない。そして、その他の多くの箇所には「さる程に」もしくはそれに準ずる時間の経過を説明する文言が旋されているのであって、上記抜粋箇所の見かけ上の多さにもかかわらず、実際には日付の飛躍が「飛躍」として意識されることはほとんどない。後述する語り本系の時間処理に関することであるが、時間の進行のテンポに緩急こそあれ、物語の時間はひたすら前方へと流れ進むよう仕組まれているのである、その中で、傍線を付した説話の介在する箇所は数としては少ないのであるが、「さる程に」等に並ぶ機能を有するものとして、やはり注目に値するだろう。

以下、個々の事例について分析する。

二、願立

注意されるのは、説話をとりまく叙述のありようである。

【願立】の直前には次のような叙述がある。

① 山門の大衆、国司師高を流罪に処せられ、目代近藤判官師経を禁獄せらるべき由奏聞す。御裁断おそかりければ、さも然るべき公卿殿上人は、「あはれとく御裁許あるべきものを。昔より山門の訴訟は他に異なり。大藏卿為房・大

宰権帥季仲は、さしも朝家の重臣なりしかども、山門の訴訟によて流罪せられにき。況や師高などは事の數にやはあるべきに、子細にや及べき」と申あはれけれども、「大臣は禄を重じて諫めず、小臣は罪に恐れて申さず」と云事なれば、をのく口をとじ給へり。

然るべき人々の、為房・季仲の例の引合いを誘い水とするようにして、続けて語り手自身が「昔より山門の訴訟は他に異なること」の先例（【願立】）を述べたてていく。そして【願立】の直後には以下の叙述がつづく。

② さるほどに、山門の大衆、国司加賀守師高を流罪に処せられ、目代近藤判官師経を禁獄せらるべき由、奏聞度々に及といへども、御裁許なかりければ、日吉の祭礼をうちとめて、安元三年四月十三日辰の一点に、十禅師・客人・八王子三社の神輿賁り奉て、陣頭へふり奉る。さがり松・きれ堤……

傍線を施したように、【願立】をはさんで、ほぼ同様の表現が繰り返され、事態は一向に進展をみなかったこと、それがついには四月十三日の強行手段を引き起こすに至らしめたことが語られる。【願立】はその進展のない状況設定の中に組み込まれているのであって、【願立】の長大な叙述は、故事先例であると同時に、こうした物語場面において、埒の開かないまま空しく過ぎていく時間経過のものとしても実感されることになる。前述のように、前年の八月十二日からのほぼ八ヶ月の日付

の飛躍をさして不自然と感じないのは、こうした説話の働きが関与してのことであろう。

ちなみに屋代本の【願立】につづく記述は次のようである。

②安元三年三月五日、妙音院殿、内大臣ニテ坐シケルガ、太政大臣ニアガラセ給フ。(中略)一ノカミコソ速度ナレドモ父宇治ノ悪左府ノ御霊其憚有り。②同四月十三日卯剋ニ山門ノ大衆 日吉ノ御祭打止テ大宮ノ樓門ノ前ニ三塔会合シテゾ僉儀シケル。国司師高被^レ処^二流罪^一、目代師經

可^レ被^二禁獄^一之由奏聞ノタメニ八王子客人十禅師三社ノ神興ヲ捧奉テ既ニ下洛スト申程コソ有ケレ、サガリ松・柳原……

覚一本は②の記事を鶴川・白山・山門騒動の一連の記述を始める前(事件の遠い淵源であるところの北面由来記事の前)に、位置せしめている。「一方流本(『覚一本』)の失敗であると断じてよい³」との見解もあるように、編年体的な順序を乱すものであるがしかし、屋代本の②の位置は、編年体的には合理的であつても、【願立】から②への記事の流れを分断してしまうものでしかないことは明らかであろう。しかも、②の傍線部を比較した場合、覚一本のそれは「奏聞度々に及といへども」という一節を加えることにより、埒の開かないことに業を煮やした大衆がついに強硬手段に訴えるにいたる事情を浮かび上がらせることにもなっている。【願立】の読みに費やされる時間は、そのじりじりするような物語内の時間の経過の代替となりうる

わけだが、屋代本の該話の分量は覚一本のその三分の一弱しかなく、「三とせが命をのべてたてまつらむ」「三とせが命をのべて給らむ事、しかるべうさぶらふ」「みとせのすぐるは夢なれや」と繰り返される、説話内の時間経過(この時間経過の幅の大きさも、問題にしている八ヶ月余の日付の飛躍を間接的に支えている)をも記さない。屋代本は、【願立】を単なる故事先例として扱っており、前後の緊密な時間の流れに無自覚であつたことを示唆するものであろう。

三、重盛追討話群

蘇武説話は別稿で扱っているので、重盛追討話群(覚一本の章段名でいえば「無文」「灯炉之沙汰」「金渡」。以下【重盛譚】と称する)にうつる。

治承三年五月十二日、辻風が洛中を襲い、不吉な占文が示されるなか、重盛が熊野に参詣、帰洛後発病し、ついに八月一日に死去する。占文のさすところはさらに、十一月七日の大地震を直接の先触れとして、同十四日に軍勢を率いて上洛した清盛の、朝廷肅清へと及ぶのであった。ここでも説話前後の行文を組上に載せる。

①上下の人々、重盛の死を「平家ノ運命ノ末ニ成ノミニアラズ、世ノ為モ必ズアシカルベシ」と歎く。

②宗盛方の人は宗盛の「御代」となることを喜ぶ。

③（平家の心ある人の歎？）「……恩愛ノ別ト云、家ノ衰微ト云、悲ミテモ猶余アリ」

④重盛の有徳なること「此大臣ハ文章端クシテ（中略）詞ニ徳ヲ兼タリ」

⑤「サレバ世ニハ良臣ヲ失エル事ヲ歎キ、家ニハ武略ノスタレン事ヲ悲ム」

⑥「入道セメテノ思ノ余ニヤ、福原ニ馳下テ閉門シテコソ御坐ケレ」

⑦「天性此大臣ハ未来ノ事ヲモ兼テ知給タリケルニヤ」

金渡

【重盛譚】

①

②

③

④

⑤

⑥

金渡

【重盛譚】

重盛夢想
無文太刀授与
灯炉之沙汰

⑧「小松殿薨セラレテ後ハ、様々人ノ心モ替リ、不思議ノ事共多カリケリ」

⑨ 小督

高倉帝小督寵愛。

其比

清盛、小督追放。

仲国、小督搜索。

8月10日アマリ

小督に姫宮誕生。

清盛、小督を出家させる。

⑩ 11月7日 大地震

⑪ 同14日「太政入道福原別業ニ御坐ケルガ、何事ヲカ思立レタリケム」軍兵を率いて上洛。

ナシ

(⑫ ↓ 卷六)

⑬ 「入道相国、小松殿にをくれ給て、よろづ心ばそうや思はれけむ、福原へ馳下り、閉門してこそおはしけれ」

⑭ 「相国禪門、此日ころ福原におはしけるが、何とかおもひなられたりけむ」

注目したいのは⑬の位置である、内容的に、①から⑬までの(⑫は除く)重盛哀惜の記述と一具のものであるが、これが覚一本においては【重盛譚】の後におかれる結果、【重盛譚】もその同じ状況を担う一環として組み込まれることになっている。すなわち、⑫に導入される《小督》の話によって、【重盛譚】との間に、重盛死去に伴う事態と死去後の事態の進展という句切りを設けている屋代本に対し、覚一本においては【重盛譚】

の後もお、重盛死去という状況が連続している。そうした設定が⑨に「此日ごろ」という一節を含ませることもなっている。重盛死去後の清盛の活動（△小督▽）を描く屋代本においては、⑨時点での清盛の福原滞在中も偶々のこととみなさざるをえない。

さらには、十五日の清盛の、静憲を前にしての述懐が

まづ、内府が身まかり候ぬる事、当家の運命をはかるにも、入道随分悲涙をおさへてこそ罷過候へ。御辺の心にも推察し給へ。

とはじまり、

凡老て子を失は、枯木の枝なきにことならず。今は程なき浮世に、心を費しても何かはせんれば、いかでも有なんとこそ思ひなて候へ。

と結ばれていることにも、⑥の存在は繋がっていく。ここで清盛が述べた後白河院の所行（八幡御幸・御遊、越前国所領没収、中納言推挙の無視、鹿谷事件）の数々が、鹿谷事件を除き、いずれも重盛を失った悲歎のただなかにひきおこされたものであってこそ、内に積もり重なった憤りは、自暴自棄的な激しさ（上記傍線部）をともなって爆発することになったのである。従って、覚一本が⑥を【重盛譚】の後に置いたのも、重盛死去という事態の引き起こした緊張感をそのままの状況に保ち続けて、十一月の清盛政変の叙述にいたるための不可欠の操作であったと評価できるだろう。そうした構成のなかにあって、

問題の【重盛譚】も単に「不思議の人」重盛の、過去のエピソードであるに留まらない。重盛の比類ない存在を語っていくことはそのまま、物語現在の重盛喪失という事実にはねかえっている。【重盛譚】はここでは、重盛死去後の八月から十一月の大地震および政変にいたる、深い不安感につつまれた緊迫した時間の経過を仲立ちすることにもなるし、清盛の悲歎に焦点をあわせれば、福原閉門中の清盛の心中を去来した思いの表象でもあった。

なお、時間的には大きな動きの無い場面だが、巻九「小宰相身拍」における【小宰相と通盛の恋】の機能についても同様のことがいえる。読み本系諸本がこの説話を紹介した後、小宰相の入水記事へと移るのに対し、語り本系諸本（屋代本は欠巻）は小宰相の入水にともない、「なぜ彼女が夫の後を追って死ぬ」というような思い切った行動に出たか、彼ら夫婦の間柄を語る⁴のであるが、その説話は

昔より男にをくるゝたぐひおほしといへども、さまをかふるはつねのならひ、身をなぐるまでは有がたきためし也。

忠臣は二君につかへず、貞女は二夫にまみえずとも、かやうの事をや申べき。

という小宰相への感嘆の言葉を導きとして「此女房と申は、……」とはじめられ、

門脇の中納言は、嫡子越前の三位、末子業盛にもくれたまひぬ。いまたのみたまへる人とは、能登守教経、僧に

は中納言の律師仲快ばかりなり。三位どののかたみ共此ねうばうをこそみ給ひつるに、それさへかやうになられければ、いかゞ心ぼそうぞなられる。

との舅教盛の悲歎のさまを描く一文に繋がっている。この語り本系の語り手の（これは小宰相入水をまのあたりにした平家の人々の思いでもあったであろう）感嘆の言葉から、残された近親者（教盛）の悲歎へと収斂していく過程に位置する【小宰相と通盛の恋】は、人物紹介として小宰相の過去を語るのみならず、入水の衝撃のあと、人々そして教盛の脳裏に瞬時に蘇ってきたであろう現在の回想そのものとしての機能をもつものと考えられる。

四、朝敵揃・鷲・咸陽宮、文覚譚

日付の進捗の幅は半月余に過ぎない箇所であるが、従属説話の機能の問題を考えるうえで注目すべき問題をもっていると思われるので、以下巻五頼朝挙兵の知らせに続く「朝敵揃」「咸陽宮」「文覚荒行」「勸進帳」「文覚被流」「福原院宣」の諸説話を取りあげる。合戦の一方の当事者の事情を語る、従属説話というには比重の重い、かつ記事量も膨大な箇所であるが、構成上は挿話に違いない。頼朝挙兵の報せへの平家側の様々な反応のなかで、清盛の、「流罪に申なだめ」られた恩を忘れた所行を激しく憤ったの、「只今日のせめかうむらんずる頼朝なり」

との言葉をうけて、【朝敵揃・鷲・咸陽宮】の説話を語り、これを

「されば今の頼預もさこそあらんずらめ」と色代する人々もありけるとかや。

と結び、続けて

抑かの頼朝とは、（中略）廿余年の春秋ををくりむかふ。年ごろもあればこそありけめ、ことしいかなる心にて謀反をばおこされけるぞといふに、高雄の文覚上人の申す、められたりけるとかや。

と、挙兵のいきさつを語りはじめ。以下につづくのが、一連の文覚関係の章段で、頼朝の院宣拝領までを語るものである。

従って、この部分は二つのグループの従属説話を組み込んでいるものであって、図示すれば次のようになる。

9月2日、早馬到来

平家側の頼朝滅亡の期待

【朝敵揃・鷲・咸陽宮】

頼朝挙兵の由来

【文覚譚】

9月18日、追討軍東下※

この説話群を受けての叙述※は次のようになっていく。

さる程に、福原には、勢のつかぬ先にいそぎ打手をくだすべしと、公卿僉議あて、大將軍には小松権亮少将維盛、副將軍には薩摩守忠度、都合其勢三万余騎、九月十八日に都

をたて、*十九日には旧都につき、やがて廿日、東国へこ
そうたゝれけれ。

屋代本には傍線部「いそぎ」がなく、*箇所「二日付タル、
早馬十八日マデ討手ヲ被下サレケルコソ不思議ナレ」との一文
がある。この箇所のみをとらえると、覚一本は平家側の速やか
な対応ぶりを語ろうとしているかのようだが、続く行文のあり
かたをみると必ずしもそうはいえない。

大將軍権亮少將維盛は、生年廿三、容儀体拝絵にかくとも
筆も及びがたし。〔中略〕維盛・忠度の武装描写。*1〕
馬・鞍・鎧・甲・弓矢・太刀・刀にいたるまで、てりかゝ

やく程にいであつたりしかば、めでたかりし見物也。薩
摩守忠度は、年来ある宮腹の女房のもとへかよはれけるが、
〔中略〕忠度と女房の恋物語。*2〕かの女房のもとより
忠度のもとへ、小袖をかさねつかはすとて、ち里のなご
りのかなしさに、一首の歌をぞ送られける。〔中略〕女房・
忠度和歌贈答。維盛・忠度、駅鈴拝領。いにしへ、朝敵
をほろぼさんとて都をいづる將軍は、三つの存知あり。切
刀を給はる日家をわすれ、家をいづるとて妻子をわすれ、
戰場にしと敵にたゝかふ時、身をわする。されば、今の平
氏の大將維盛・忠度も、定てかやうの事をば存知せられた
りけん。あはれなりし事共也。

これは覚一本の本文で、屋代本もこれにほぼ一致する。ただし、
屋代本には〔 〕内*1*2の記述がない。出陣にあたって、

忠度が女房の贈歌に応えた歌は「わかれ路をなにかなげかかんこ
えて行関もむかしの跡とおもへば」と、女房の歎をたしなめる
ものではあるが、こうした贈答をかわすこと自体、「家をいづ
るとて妻子をわすれ」という「三つの存知」に抵触するもので
はなからうか。維盛・忠度の美々しい装束も、この後の富士川
でのみじめな敗走を思えば、虚しさをいっそうかき立てるもの
ではない。事実、物語はさらに進んで、

さる程に、此人々は九重の都をたて、千里の東海におもむ
き給ふ。たいらかにかへりのぼらむ事もまことにあやうき
有さまどもにて、……

とはやくも事熊の芳しくないことを予告し、忠清に
あはれ、大將軍の御心ののびさせ給たる程口おしい事は候
はず。いま一日も先に打手をくださせ給たらば、足柄の山打
こへて、……

と出陣が既に決定的な時期を逸していたことを語らせるのであ
るから、先の「いそぎ」も、実質を伴わない言葉として受けと
めるべきであらう。「いそぎ」の有無に関わらず、「(頼朝に)
勢のつかぬ先に」という期待は九月十八日の出立時点では、既
に裏切られていた。そうした設定の中で、岩波大系本二十頁余
におよぶ長大な【朝敵揃・他】【文覚譚】の存在は、平家が結
果的に費やしてしまった半月余の時日の取り返しにつかない大
きさをも物語るものとならう。あるいはそれは悠長に過ごされ
た時日を実体化したものであるといってもよい。前にも述べた

命ぜられた「サル程ニ八月十日アマリニモ成ニケリ」という日付も、8月1日の重盛死去と清盛クーデターの前触れである11月7日の大地震とを繋ぐ、物語の一環としての役割を果たしている。

ちなみに、④にいう重盛死去後の「不思議」とは、清盛が小督を出家においやったことをさすはずで（史実でも治承三年冬のこと）、内裏復帰後、「夜々召レケル程ニ、姫宮一人出来サセ給ケリ」とある部分の解釈の仕方によっては、小督捜索の「八月十日アマリ」は実質的には前年のことという可能性もないではないが、日付上は上述のように重盛死去と大地震とを繋ぐものとみておいてよいだろう。なお、《小督》については、中西美智子氏「平家物語成長変化の一断面——屋代本「小督」と他本との関係——」（文学・語学4）57・6）などにくわしい。

(4) 松尾葦江氏『平家物語論究』85、102頁。

(5) 佐々木八郎氏『平家物語の達成』(74、91頁)に、八かねて私は「覚一本」巻第五「大庭早馬」は「富士川」に連結するものであって、両者の中間に介在する「朝敵揃・咸陽宮・文覚荒行・福原院亘」の四章段は、相互の行文の上から見ても、物語的構成の上から見ても、「大庭早馬」と「富士川」との両章段に対しては挿話的位置にあるものであると考えている。√との指摘がある。

(6) この結びの一文の位置づけを含む、「朝敵揃」「咸陽宮」の章段をどのように物語の展開に関わらせて理解するかは、諸説ある。私見は「頼朝挙兵の位相——反平家の系譜から——」（国語国文学報47）89、3）に述べた。

(7) 『平家物語全注釈』（中巻120頁）に「このことばは宗盛の「心のびたる」ことへの不満の表現であるとして解釈すべきものであると思

う。維盛がのんびりして道中が長くかかり過ぎたといえる内容は、ここには全く記されていないからである。」との指摘がある。

(8) 承久の乱の勃発の報が鎌倉へ届いたのが承久三年五月十九日、これを受け幕府軍が鎌倉を進発したのは同二十一日（慈光寺本『承久記』）である。直接の参考にはならないにしても、九月二日に届いた早馬への対応が九月十八日というのは、悠長に過ぎたとのそしりをまめかれない。

(9) その議論の一端は(6)の拙稿で触れた。また、小稿のもとになった、中世文学会での口頭発表の際、

覚一本の構成においては「朝敵揃・咸陽宮・文覚荒行・福原院亘」が「大庭早馬」と「富士川」との間に介在し、そして「福原院亘」が直ちに「富士川」の「さるほどに福原には勢のつかぬ先に急ぎ討手を下すべしと公卿僉議あつて」につながるために弛緩を感じさせない概がある。

との、佐々木八郎氏の説（注5著）を引いたことに対し、水原一氏から、むしろこの部分は弛緩しているとみるべきではないか、との批判をいただいた。たしかに、本論で述べたように、「急ぎ」を文字どおりにとって緊迫した構成をみせているとみなすのは問題がある。ただし、この部分に弛緩を感じるとしたらそれは、平家が結果的にうかうかと過ごしてしまっただ時日を実感させるべくしてのものであったといえよう。

付記、小稿は中世文学会（於中京大学）'90・10・21）での口頭発表の前半部分を礎稿としている。水原一氏をはじめ、発表会の際また、事後にご批判賜った諸氏に御礼申し上げる。